

第4章 ミツケル誕生

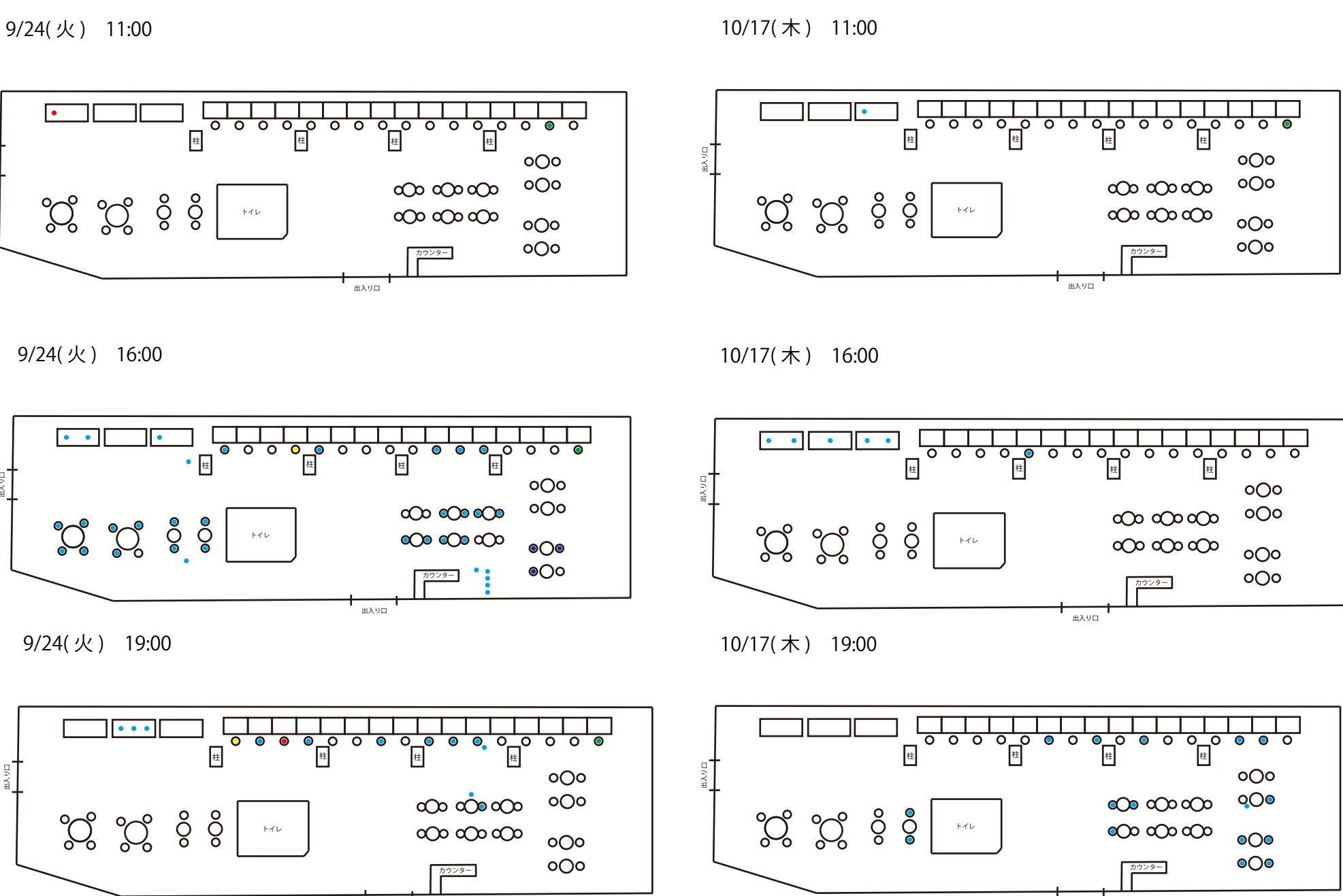
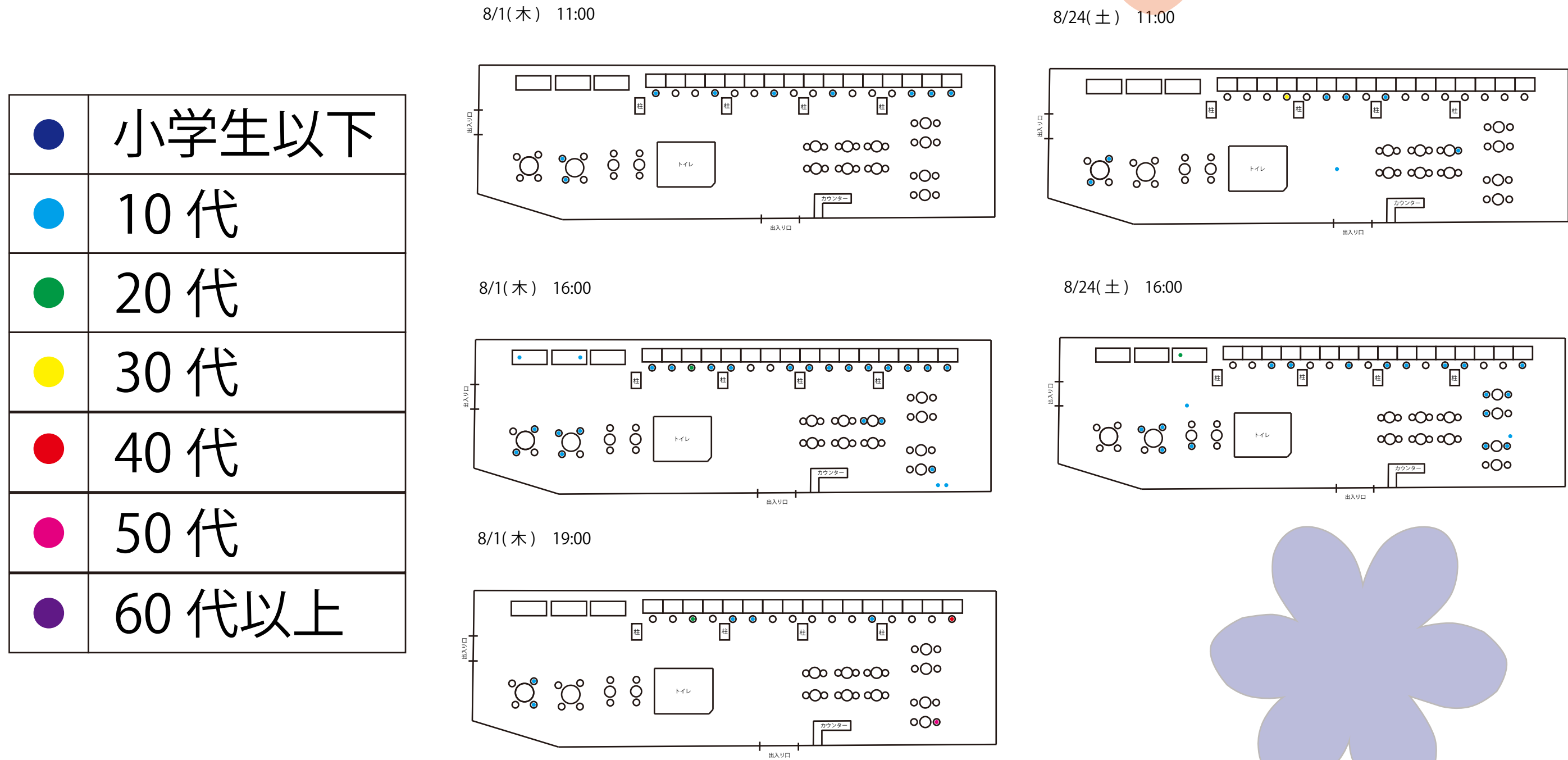
南と西に出入り口、東側には大きな窓とバルコニー、北側には見附駅で行き交う電車を見られるように窓が配置されている。真ん中に位置するトイレによってふんわりと空間が分けられている。カウンター席 16 席、テーブル席 32 席、3 人掛けソファ 3 脚で全座席数は 48 席である。カウンターとソファ以外は自由に動かすことができ、利用者の状況によって座席が変改していくのも MITSUKERU の物理的空間の特徴のひとつである。

見附市の公共施設ではあるが現在の運営は、若者の活動支援を目的とした **NPO 法人「do みつけ」** が運営支援を行っている。do みつけは、中高生とのまちづくりを軸に【見附版カムバック支援事業】に取り組んでいる。見附駅整備事業のひとつである「見附駅周辺つかう会議」のコアメンバーが中心となり 2022 年 4 月 1 日に設立した。またパートナー企業として見附市に本社を構え包装材販売・パッケージトレイ製造などの事業運営を行っている（株）ミカサ・（株）サンプラスト三笠が施設の維持管理を行っている。



第5章 ミツケル利用実態調査

実態調査を行ない、時間帯と年代を分けて図面に起こした。時間帯は 11:00、16:00、19:00。年代は色で分け、青を小学生以下、水色で 10 代、緑で 20 代、黄で 30 代、赤で 40 代、桃で 50 代、紫で 60 代以上を表現をしている。



第6章 ミツケルのミライ考察

現代のまちづくりでは**中高生は軽視されがち**である。かろうじてあっても、図書館を作るついでで自習コーナー作るぐらいだろうか。自習スペースは必要な場所ではあるがサードプレイスとして何かが生み出されるにはそぐわない場所でもある。

現代のまちづくりで中高生が軽視されがちなる理由として、選挙権がないからだと考えている。中高生向けの政策を打ち出しても対象の市民には投票権がないため選挙における得票率は変わらない。高齢者支援、子育て支援、移住支援があっても中高生の公的支援は不登校や修学支援以外は存在しない。学童には 10 歳の壁がある。中高生のうちに遊び場がない、交通の弁が悪い、学校以外のコミュニティに参加できていないなどの理由で地元が嫌いになり大学受験や就職などきっかけを作って外に出て帰ってこないことが起きているのではないだろうか。『The Great Good Place』は 1989 年に出版された本である。30 年以上の月日が中高生への働きかけがどれだけむずかしいかを表している。思春期はむずかしい、もう何かを支援が必要なほど幼くない、そう考えるのも理解ができる。しかしさまざまな物事に刺激を受けやすく自分自身で将来を考え始める年代であるからこそ、土地への思い入れや地域の人々との交流が大切で、そこに目を配ることのできる見附市は行政を中心としたまちづくりにおいて一歩先を行っていると感じる。

MITSUKERU 運営の do みつけは、中高生とのまちづくりを軸に【見附版カムバック支援事業】に取り組んでいる NPO 法人である。MISTUKERU の現在の活動の効果が実際に体感できるのは、一度進学のために見附市を出た学生たちが中高生の頃に感じた絆を求めて帰ってきて MITSUKERU に顔を出した時だ。これから早くても 4 年後、数値としてしっかりと結果が出るのは 10 年後かもしれない。現在の MITSUKERU が続けば、MITSUKERU は見附市の中高生のサードプレイスに必ずなれると考えている。具体的には、伝統的サードプレイスに当てはまる施設になるはずである。ただ時間を潰すだけ自習をするだけであれば、カフェの 1 人席に座っていれば良い。**中高生たちの新しい挑戦を応援し、新たなつながりが生まれる場所であってほしいと願っている。**

